今月のことば　　令和5年（2023）11月　<No.207>

知性ではなく感性で

「そこには美しい花が咲き乱れ、金銀や瑠璃でできた宝の木々や池・建物があり、美しい鳴き声の鳥たちが飛んでいる・・・。」

『仏説阿弥陀経』などの経典には、お浄土の麗しい様子が細かく説かれています。しかし現代人がこれを聞いた時、「そんなもの実在するの？」と疑問に思われる方が多いのではないでしょうか。

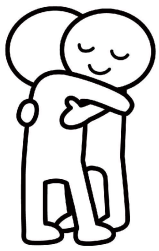
親鸞聖人は85歳の頃、弟子にあてた手紙の中で次のように言われています。

「浄土にてかならずかならず待ちまゐらせ候ふべし」

「自分が命終えた後は、悟りの浄土で必ずあなたを待っていますよ」ということばです。浄土とは本来、「煩悩を滅した悟りの世界」を指します。しかし親鸞聖人は、浄土を「再び会える世界」としても捉えていることがうかがえます。

『阿弥陀仏と浄土　～親鸞が歩んだ道～』内藤知康　著より

私も、特に大事な人を亡くした経験があります。とはいってもお父さんお母さんとか、あるいはお祖父さんお祖母さんとか、そういう人を亡くすというのは、ある意味、どこかに当然という思いもあるんですよね。親を送るのは子どもの義務であるということもできます。･･･亡くなるのがあまりにも急な時はショックが大きいですが、病気などでしばらく悪い状態が続けば、覚悟していたことでもありますから、わりあいに受け容れることができます。



ただ、逆は大変です。子どもを亡くされた時のお通夜とかお葬式は、言葉が出てきません。しかし、そういう場面においても、**一旦は別れてもまた出会う世界を持つことができるんだというのは、非常に大きな安らぎをもたらしてくれます。**･･･

自分の大事な人と別れた時に、また出会う世界があるんだということを全然聞いたことがない人にとっては、別れは別れっぱなしという思いでしか受け取ることができません。しかし、また出会うことができる世界があると普段から聞いていた人は悲しいことは悲しけれども、その悲しみの中に、また一面、どこかに安らぎというものを持つことができます。これは知的な世界ではないんですね。頭で考えてどうこうという世界ではなく、感性で捉える世界です。**浄土というのは、知性ではなく感性で捉える世界**なんだと押さえることができます。

浄土真宗は「凡夫の宗教」であり、煩悩や執着から離れられない私たちのための教えです。真実の智慧を持たず「情や感性」でしか生きられない私たちに、真実の智慧（阿弥陀如来）の方から喚んでくださる救いです。だからこそ、私たちの「感性」に訴えかける表現が取られているともいえます。「知り合いのいない美しい世界」よりも、「親しい方が待っている温かい世界」へと生まれたい。浄土はそんな私たちの「感性」に寄り添ってくれるのです。

慧日山　真光寺